



月刊「HANAYASURI」2023年5月号（通巻13号）

P2-3 巻頭エッセイ「文化的なことがら」相地透

P11 観察会レポート①「詩と遊ぶ 其の一」相地透

P13 「ユスリカから見た『ため池の自然』②」近藤繁生

P16-17 訪問記「2023年 久しぶりのスリランカ」伊藤康子

P20-21「棕鳩十が愛したお祭り『阿島祭り』を訪ねて」相地透

表紙／「こさぎ」岩田郁代 Ikuyo IWATA

P4-10 鼎談「今、幼児教育でしたい事」宍戸洋子、森下京子、相地満

P12 「水をめぐる話し 第二回」土山ふみ

P14-15 連載「子どもが不思議と出会う時（十三）」森下京子

P18-19「チェイン・オブ・ライフ」相地満

P22-23 観察会のお知らせ [5～6月]・書籍案内



巻頭エッセイ「文化的なことがら」

最近、文化的なことがらに、直接的に関わる人たちの寂しいニュースをよく目にする。

数日前、一枚のほがきが家に届いた。チャップリンの映画「ライムライト」のポストカードだった。何だろうと思ひ、裏返して読んでみると、3月に閉館した映画館からだった。えんじ色のペンで丁寧に、常設映画館としての営業を終了した旨が、綴られていた。数年前、コロナで上映が出来なかった頃に、少額だが寄付金を寄せた事へのお礼だった。

同じく3月末に、ある書店が閉店した。その書店は、自分が高校生だった頃には、すでに営業しており、学校からの帰り道に、何度か立ち寄ったことがあった。ただ、その当時は、街には個人で営んでいる書店がまだ何軒もあり、そのお店のほかにも帰り道に数軒あったため、常連とは言えず、その道を通ったときに、ふと立ち寄る程度だった。

それでも、閉店するとなると寂しいもので、閉店日の前日に、二十数年ぶりに訪ねてみた。店に入り書棚を見渡すと、同じように考えて本を買った人達がたくさんいたのだろう、書棚にだいぶ隙間があった。一つ一つの棚に残る本のタイトルを一冊ずつ眺めて、気になる本を手にとっていく。小一時間いたであろうか、最終的に2冊の単行本を買って帰った。

閉店のニュースが新聞で報じられた際、この書店を懇意にしていた作家の方が「書店は文化的ぜいたくなんですよ」という言葉を用いて、閉店の報を惜しんでいた。自分の本を紹介し、積極的に取り上げてくれた書店が無くなることは、痛切な事だと思う。実際に、閉店となる最後まで、イベントを開催し賑わせたそうだ。

現在、本を購入する多くの人が、書店での購買と並行して、家でインターネットで購入しているわけだから、わざわざ書店に行く時間を費やし、時間をかけて念入りに選び購入することを「ぜいたく」と捉えるのは一般的な感覚かもしれない。その方の人となりや発言の背景を知らないで、新聞に記載してある言葉から考えた事だが、私は、書店は「文化的インフラ」なのではないだろうか、と思う。

子どもの頃から今までずっと、本が置いてある場所が好きなので、大小の書店、古書店や新古書店、図書館や資料館にも足を運ぶ。遠方に行けば、博物館や美術館のミュージアムショップもそうだし、最近では、カフェやホテルのロビーなどにも本が並べてあるところが多いので、手に取らなくても、どんな本が置いてあるのか、つい視線が向く。

仕事の資料として図書館で本を借りる場合は、確実に借りられなければいけないので、インターネットで下調べしてから行く。古書店でも簡単に手に入らない数十年前に書かれた本を実際に手に取って読むことが出来る図書館は、分かりやすく「文化的インフラ」である。

新聞などで紹介された本を実際に手に取って見てみようと思ひ、書店に行くのは、図書館の場合とは異なる。昔であれば、書店員さんと馴染みになって、「最近、面白い本出てない?」「こういうことを調べているんだけど、どの本読んだらいいかな」といった会話がなされていた。今でも、街の書店文化が根づいている土地であれば、そういう書店があるだろう。ただ、今は、インターネットで調べれば情報はすぐに手に入る。情報の提供は、書店のほんのわずかな役割に過ぎない。

では、どういう場所なのかというと、こう考えている。「普段から意識的・無意識的に考えていることがらをつなぎ合わせて、今、買っておくべき本に導いてくれる場所」。訪ねることで自分の思考を整理出来る場所である。書棚をつぶさに観察すると、たくさんの気づきがある。気づくことで、自分が今、大切なことがらを、より深く認識する。もし、書店が地域から完全に無くなったとしたら、巡り合うことが出来たかもしれない大切な文化に近づく機会が失われる。

3月下旬に、舞踊家の方々からお誘い頂き、父母と一緒にダンス公演・イベントを楽しませて頂いた。言葉のない、身体とわずかな道具だけを使った身体表現。聞こえなくても、そこにはダンスの言葉がある。その言葉がどう届くかは、観客一人一人がどのように毎日の生活を捉えて過ごしているかで異なるだろう。忙しい日々を送っていても、わずかな時間、自分の今いる周囲を観察し、何かに気づくだけで、文化的なことがらの感じ方は変わる。そして、毎日の気づきの積み重ねは、他者への慈しみを生む。難しい事ではない。ぜいたくな事でもない。文化的なことがらは、誰しも平等に生活の中に在る。

(相地透)